

回想のカトマンズ

三星 宗雄

キーワード：カトマンズ、ネパール、地震、ダルバール広場、バシュパティナート寺院、スワヤンブナート

はじめに

2015年4月25日（土）午前11時56分（日本時間午後3時11分）、M7.8の大地震が首都カトマンズを襲った。推定震源地はカトマンズの北西80キロ付近で、ネパール第2の観光都市ポカラとの中間地点である。エベレストベースキャンプでの雪崩による死者を含め、5月4日（月）の段階で死者数は7,240人に上った（ネパールのみ。読売新聞）。負傷者数はその2倍と推定されている（米国CNN）。

当初この論文は、「色彩の地理学：カトマンズの色彩」というテーマで報告されるはずであった。しかし市内にあるダルバール広場やダラハラ塔など、カトマンズ市民やネパール国民の精神的な拠りどころとなっている建造物が崩壊し、今はその姿を見ることができない。そこで急きょ予定を変え、地震直前のカトマンズの姿を画像としてできるだけ多く残しておくことにした。幸いこの号はカラー刷りであるので、その迫力ある永遠の姿を最大限読者に伝えることができる。筆者が手元に持つカトマンズの画像は微々たるものであるが、それでもその一刻も早い復興を祈りつつ、公開しないわけにはいかないと考えるのである。「色彩の地理学：カトマンズの色彩」については別な機会に譲りたい。

地震直後に筆者らが宿泊したホテルにメールで安否確認の連絡をしたが、ホテルも関係者も全員無事であるという返信があった。その返信の中に、「ダラハラ塔が壊れた」という言及があった。やはりカトマンズ市民にとってそれらの建造物は特別なもののなかであろう。

以下の画像はすべて筆者が自分のカメラで撮影したものである。撮影するのに追われ、訪れた場所などについては記録していない。現在確認中であるが、本号には間に合わない。したがって場所等が間違っている可能性がある。その場合には筆者の不勉強に免じてご容赦いただければ幸いである¹⁾。しかし一方、間違っている恐れのある注釈はむしろ要らないのかも知れない。沈黙の画像の方がかえって真実を伝えるようにも思われるからである。

筆者らが大学から旅費の援助を得て、カトマンズに出発したのは2015年3月26日（木）であった。上に記したように、目的は「色彩の地理学」というテーマの下にヒンドゥーの色彩について調査することであった。ちなみにネパールは国民の8割がヒンドゥー教徒である。

学会で訪れたタイやマレーシアあるいは直前に出かけたベトナムは中国の文化が強烈に感じられるところである。したがってそれらの国においては、わが国との文化的な違和感それほどない。多かれ少

1) これらの画像については商業目的以外で、自由に使っていただきたい。下記まで連絡いただければオリジナル画像をデータで送ることも可能である。

mitsum01@kanagawa-u.ac.jp

なかれその風景（ベトナムの水田風景はわが国とまったく変わらない）や食（フォーはわが国のうどんである）は納得できるのである。

しかしネパールはそれらの国々とは全く異なる異次元の世界であった。外部からの旅行者の目にはやはりインドの文化圏と映った。ヒマラヤ山脈が中国からの文化の伝搬を阻んだに違いない。顔かたちが異なるのもその理由の1つであろう。しかしその最大の理由は宗教（への態度）ではないだろうか。1956年インドで開かれた第1回アジア作家会議に日本代表として参加した堀田善衛の「そこに宗教があるというおっかない現実」という言葉が今でもそれを見事に言い当てている（『インドで考えたこと』、森本、2003）。ネパールにもそれと同じ現実がある。

1. カトマンズ国際空港

シンガポールを経由して、カトマンズ国際空港に着いたのは3月27日12:05であった。空港そのものは小さく、わが国の地方空港とほぼ同じ規模と見た。入国ビザを持っていなかったので、入関で15日間有効の入国料として25米ドルを納めた。

空港を出ると、タクシーと送迎車の波であった。我々のホテルの迎えの車はどこにもいなかった。我々の狼狽ぶりを見て、多くのタクシー運転手が声をかけてくれた。やがて迎えの車が到着した時、周囲の人々が共に喜んでくれたのは非常にいい印象であった。



図 1.1 カトマンズ国際空港



図 1.2 同 待合室



図 1.3 同 待合室

2. カトマンズ市

カトマンズ市は人口 100 万人ほどの街だが、観光シーズンには登山客やハイカーなどで 150 万人近くになるという（読売新聞，2015 年 5 月 1 日夕）。図 2.1 および 2.2 から分かるように、カトマンズ市は盆地であり、案内図や CNN などではしばしば Kathmandu Valley（谷）と呼んでいる。そのためか市内の空気はいいとは言えず、多くの市民はマスクをしていた。

道路に交通信号がほとんどないのはベトナムと同じであった。また交通機関としてバイクが多いのもベトナムと同じであった。ただベトナムと異なり、バイクが何列にもなって歩道を走ってくることはなかった。図 2.6 はバイクと自動車とのちょっとしたトラブルの時のショットである。タクシーは筆者が見た範囲内ですべて日本のメーカー車で、色彩は統一されていた。

登山家やハイカーのための宿泊所が集中している地区はタメル地区と呼ばれ、バックパッカーの聖地である。お土産店や登山用具店などが密集している。筆者らのホテルもその一角にあったが、その画像が手元にないので、残念ながら示すことができない。

立ち並ぶさまざまな店の中には日本語の古書専門店があり、店内にぎっしり日本語の古本が置かれていた。筆者が少しばかりのお土産を買った店の店主（あるいは従業員）は片言の日本語を話した。ちなみに案外日本語を話す人が多い。聞けば、以前日吉（横浜）と行ったり来たり的生活を送っていたとい



図 2.1 カトマンズ市の眺望



図 2.2 同



図 2.3 カトマンズ市近郊



図 2.4 同



図 2.5 同



図 2.6 バイクが多い (同)

う。タメル地区には両替がいたるところにある。1米ドルがほぼ100ネパールルピー（NR）なので、日本円との交換レートも分かりやすい。ちなみにネットなどでは、日本円とネパールルピーの両替はできないとあるが、実際にはできるようである。

少し驚かされるのは、先のベトナムもそうであったが、旅行者としては西欧白人が圧倒的に多いことである。特にヨーロッパからの旅行者が多い。

3. ダルバール広場 Durbar Square

今回の地震で大きな被害を受けたダルバール広場はバクタプール（Bhaktapur）と呼ばれる歴史的な街の中にある。バクタプールは12～15世紀の間全ネパールの都であり、多くの歴史的な建造物が集中している。わが国の京都に相当する町と言えようか。

この地区には今でも10万人の人々が生活を営んでいる（『バクタプール案内パンフレット』より）。地区内には多くのレストラン、お土産店、一般商店等が所狭しと並んでいる。それ以外には手工芸職人、ビジネスマンや公務員も居住している。しかし筆者らには見えなかったが、大部分は農業に従事しているという（同パンフレット）。

以下ダルバール広場を中心としたバクタプールおよびその周辺で見た建造物および神像または信仰の事物を順不同に示す。筆者の勉強不足のため、画像1つ1つに注釈を付けることができないのが残念である。



図 3.1 ダルバール広場



図 3.2

図 3.1 がその中心的な存在であるダルバール広場である。「ダルバール」とは「宮廷」という意味である。今でも王族の戴冠式や即位式が行われる広場である。今回の地震で左側の建物は崩落したが、前方中央の建物は残ったようである。



図 3.3



図 3.4



図 3.5



図 3.6



图 3.7



图 3.8



图 3.9



图 3.10



图 3.11



图 3.12



図 3. 13



図 3. 14



図 3. 15



図 3. 16



図 3. 17



図 3. 18



図 3. 19



図 3. 20



図 3. 21 著者らは思わず姿勢を正した。



図 3. 22

上に述べたように、ネパール国民の 8 割がヒンドゥー教と言われているが、筆者には寺院にしろ神像にしろ、どれがヒンドゥー教であり、どれが仏教なのか皆目見当がつかなかった。おそらく相互に入り混じっているのであろう。たとえばわが国の弁天さま（弁才天）はもとをただせば、インドのサラスバティーというヒンドゥー教の女神で、それが仏教特に密教を通じてわが国に伝えられたものである（森本，2003）。また七福神の中で、弁才天以外に、大黒天、毘沙門天、吉祥天の四神がインド発祥のヒンドゥー教の神様である（森本，2003）。特に大黒天はヒンドゥー教の三大主神の 1 つ、シヴァ神の別名「マハーカーラ」の訳なのである（森本，2003）。我々のところに染みついている「輪廻転生」さえもヒンドゥー発祥なのである。

現地の寺院を訪れて、もっとも畏怖感を感じるのは神像に塗られた赤や黄色の色粉であろう（図 3. 23, 24, 28~31 その他）。もちろんご利益を願ってのことである。この強烈な赤色と黄色にネパール（ヒンドゥー）の人々の信仰心の篤さを感じ取るのである。



図 3. 23



図 3. 24



図 3. 25



図 3. 26



図 3. 27



図 3. 28



图 3. 29



图 3. 30



图 3. 31



图 3. 32



图 3. 33



图 3. 34



図 3. 35



図 3. 36



図 3. 37



図 3. 38



図 3. 39



図 3. 40



图 3.41



图 3.42



图 3.43



图 3.44



图 3.45



图 3.46



図 3. 47



図 3. 48



図 3. 49



図 3. 50



図 3. 51



図 3. 52



図 3. 53



図 3. 54



図 3. 55



図 3. 56



図 3. 57



図 3. 58 黄色いシャツの女性が叩くドラムに合わせた宗教音楽

上に述べたように、バクタプール地区は単なる歴史の町ではない。さまざまな生活が息づいているのである。ダルバール広場に隣接した一角で、先祖の供養（と思われる）行事が行われていた（図 3. 59～61）。そのすぐ近くでは、一人の若い女性（図 3. 58 で黄色いシャツを着ている人物）のドラムに合わせて楽器をかき鳴らしていた。この演奏は供養の行事のために行われていたと思われるが、かなりパンチの利いた演奏であった。その周囲にはゴザが敷かれた「観客席」があり、演奏と供養を見守る人々がいた（図 3. 59）。



図 3. 59



図 3. 60



図 3. 61



図 3. 62



图 3. 63



图 3. 64



图 3. 65



图 3. 66



图 3. 67

4. パシュパティナート寺院 Pashupatinath

パシュパティナート寺院はガンジス川の支流であるバグマティ川沿いにあるネパール最大のシヴァ寺院である（図 4.1～4.6）。ヒンドゥーの聖地であり、インドを含めたヒンドゥーでも屈指の寺院である。今回の大地震の後、しばしばテレビで映像が放映された。それは死者を荼毘にふす場面である。「こんなに多くの炎を見たのは初めて。災害の悲しさを改めて感じた」と知人の火葬に訪れた人は語っている（読売新聞，2015 年 4 月 27 日）。普段は数か所で火葬が行われる程度であるという。

ヒンドゥーでは死者は火葬され、遺灰は川に流される。ここバグマティ川にもその設備がある。この地に足を踏み入れた時、煙が立っている情景が理解できなかったが、近づくにつれてその意味が分かってきた。火葬場については写真撮影ができないので残念ながら遠景としてしか示すことができない（図 4.3）。

ちょうどサンドウィッチのように、死者を材木（それほど太くない。直径数センチぐらいだろうか）ではさみ、ワラのようなもので火をつけるのである。死者の姿は外からは見えない。また臭いもない。荼毘の場面を近親者が見守っているが、嘆き悲しむような場面はない。おそらく荼毘の場面は告別の儀式の一番最後の場面なのであろう。あるいはヒンドゥーの輪廻転生の思想の表れとも考えられる。短い時間我々を案内してくれた「臨時ガイド」はこの川は聖なる川ガンジスに注ぐと言葉に力を込めて語ってくれた。

当ガイドによると、マザーテレサの家（あるいは生家だったかも知れない）が寺院境内のすぐ外にあるようであったが、見に行くことはできなかった。また死を待つための建物（かれはホスピスと呼んでいた）を紹介された。これは、ヒンドゥーでは、「人が死ぬと臨終の部屋は穢れたものとみなされ、……（中略）……死期の迫ったヒンドゥーは、家人に迷惑のかからぬよう、屋外（庭など）で臨終を迎えることを望むという」

（森本，2003）。こうした死生観からきているものであろうか。

上に記したように、ヒンドゥー教では出産祈願も信仰の対象である（森本，2003）。そのため性的あるいはエロティックな描写や神像がしばしば見られる。図 4.22 は男女の交わりを示すものであろう。図 4.22 の神像は赤い色粉が塗られていなかったが、図 4.23 では一分の隙間もなく赤（オレンジ色）一色であった。多くの女性が豊穣多産を願ったのであろう。



図 4.1 パシュパティナート寺院とバグマティ川



図 4.2



図 4.3 遠景としての火葬場。煙が上っている。



図 4.4



図 4.5



図 4.6



図 4.7



図 4.8



図 4. 9



図 4. 10



図 4. 11



図 4. 12

図 4. 10～4. 23 はバグマティ川をはさんで、パシュパティナート寺院と反対側にあるおそらく歴代王家の墳墓群である。それらの墳墓の中には周囲を石塀で取り囲まれたものがある。そうした墳墓では正面の墓碑の反対側に「ヒンプン」があり、どこか沖縄が思い起こされた。中国文化の浸透であろうか。



図 4. 13



図 4. 14



图 4.15



图 4.16



图 4.17



图 4.18



图 4.19



图 4.20



図 4. 21



図 4. 22



図 4. 23



図 4. 24



図 4. 25



図 4. 26 バグマティ川



図 4.27 花ダイコン (?)



図 4.28 レンギョウ (?)

図 2.26 はバグマティ川である。この部分に限れば、川幅 10 メートル、水深 20～30 cm であろうか。この川が聖なるヒマラヤから流れてくるのかどうかは不明だが、上述したように最終的にはガンジス川に流入するとされる。最後に同川べりで見た花の映像を添えておこう。図 4.27 はわが国の花ダイコン、図 4.28 はわが国のレンギョウに似た花である。

5. スワヤンブナート Swayambhunath

カトマンズ中心部から 2km ほどのところにある主に仏教寺院である。サルが多いのでモンキー寺院とも呼ばれる。図 5.1～5.5 はスワヤンブナート仏塔である。2000 年の歴史を誇るネパール最古の仏塔である。わが国の仏塔とはまったく異なる姿である。ちなみに多くの（あるいはすべての）仏塔には「目」が描かれている（図 5.32）。これは四方のすべてを見通すという仏陀である。図 5.5 にはサルの姿が見られる。これは本物である。



図 5.1



図 5.2



図 5.3



図 5.4



図 5.5 サルは本物である。



図 5.6



図 5.7



図 5.8



図 5.9 奉獻ストウパ



図 5.10



図 5.11



図 5.12 プージャ

図 5.12 はプージャの儀式である。プージャはヒンドゥー教における神像礼拝の儀礼を言う。この地震でスワヤンブナートでは仏塔などが倒壊した（読売新聞 5 月 9 日）。残念ながら本紙に掲載した建物のどれが倒壊したのかについては分からない。一方地震後がれきの撤去作業を行っていたところ、仏塔の中から小さな仏像やコインが見つかったという（同）。仏像は 500 年以上前のものとみられ、災い中新たな発見となった。



図 5.13 同



図 5.14 同



図 5.15 同



図 5.16 同



図 5.17



図 5.18



図 5.19



図 5.20 クリシュナ神 (?)



图 5.21



图 5.22



图 5.23



图 5.24 寝仏（寝釈迦）



图 5.25



图 5.26 美人仏



図 5. 27



図 5. 28 クリシュナ神 (?)



図 5. 29



図 5. 30



図 5. 31



図 5. 32 仏陀の目



図 5. 33



図 5. 34



図 5. 35



図 5. 36



図 5. 37 仏陀の目



図 5. 38



図 5.39 神像



図 5.40



図 5.41



図 5.42 神像



図 5.43



図 5.44



图 5.45



图 5.46



图 5.47



图 5.48



图 5.49



图 5.50 曼荼羅



図 5. 51



図 5. 52



図 5. 53



図 5. 54



図 5. 55



図 5. 56



图 5.57



图 5.58



图 5.59



图 5.60



图 5.61



图 5.62



図 5.63 一家による供養（?）



図 5.64 同



図 5.65 同



図 5.66 同



図 5.67 同



図 5.68



図 5. 69



図 5. 70



図 5. 71



図 5. 72



図 5. 73 仏陀の目が四方を見渡している。



図 5. 74



図 5. 75



図 5. 76



図 5. 77



図 5. 78

おわりに

5月12日(火)12:50(日本時間同16:05)、ネパール東部の中国国境近くで余震と見られるM7.3の地震が発生した。ネパール国内で少なくとも57人が死亡、1100人以上が負傷したと伝えられている(読売新聞、5月13日)。インド、中国、バングラデッシュでも死者があり、その数は75人に上った(同)。ネパール国民は今まさに恐怖の最中にある。

我々を空港まで迎えに来てくれたホテルのドライバーは車内で、自分たちには2つの有名なものがある。1つは仏陀が生まれたところ、もう1つはエベレストだ、と語ってくれた。ヒンドゥー教の国とは言え、仏陀の生地は彼らの誇りである。歴史の運命によって今は仏陀は遠くの宝になってしまったが、世界の他の国では決して持ち得ない宝であることは間違いない。当分余震が続くと思われるが、それら2つの偉大な宝を永遠の誇りとし、1分でも1秒でも早い復興を願わずにはいられない。頑張れネパール(ネパール国民)。

引用／参考文献

バクタプール案内パンフレット『ようこそ文化の都市へ』

森本達雄（2003）『ヒンドゥー教-インドの聖と俗』，中公新書．

読売新聞 2015 年 4 月 26 日記事．

同 4 月 27 日記事．

同 4 月 28 日記事．

同 5 月 1 日（夕）記事．

同 5 月 2 日記事（朝夕）．

同 5 月 4 日記事．

同 5 月 9 日記事．

同 5 月 13 日記事．

Kathmandu in recollection

MITSUBOSHI Muneo

Keywords : Kathmandu, Nepal, earthquake, Durbar Square, Pashupatinath, Swayambhunath

Abstract

A powerful M7.8 earthquake hit Nepal on April 25, 2015. The epicenter was rather near Kathmandu. The second earthquake of M7.3 again hit Nepal on May 12. Death tolls are reportedly more than 8,000, and more than 14,000 injured. Many historical buildings broke down in Kathmandu and its surroundings including Durbar Square and Dharahara Tower.

The author visited Kathmandu just one month before the earthquake to collect data on colors of Hinduism. He was to contribute a paper with the title of “The Geography of Color: Color of Kathmandu”. But he gave up his original plan after the quake, and decided his mind to leave photos of buildings, temples, statues and other beautiful creations as many as possible as memories of Kathmandu on this issue instead.

The images of such things as above in Durbar Square, Pashupatinath and Swayambhunath were recollected in photos praying for their reconstruction as fast as possible in the future.

Last but not least, the author would like to express his deep sympathy to Nepali people.